



中高生とともに差別と闘う

「なずなと渚と」

吉成タダシ



もしかすると相模原市で起きた事件は犯人だけの問題ではなく、薄皮のように社会に蔓延している差別性が表出しただけのことであって、より深刻なのは、「キチガイ」のような言葉を無神経に使えてしまえる社会そのものではないだろうか。

こんなやりとりを世の中に問題提起できないかと、またしても、地元紙の読者コーナーに投稿することにしたのです。(図書カードめあてではありません)

「最近、ある言葉がすごく気になっていきます。「キチガイ」です。毎日のように学校生活の中で「あほ」とか「ばか」に近い感じで変わったことをしている人や急に何かを言い出す人に対して、遊び感覚で使われています。友達に相談をすると「ネット動画や会員制交流サイト(SNS)の世界で笑いの対象として当たり前に使われていて『基地外』とも書かれている。それは全国的な問題と思う」と言われま

した。もとは、精神などに障害のある人をばかにし、差別の対象として使われた言葉です。意味を知らずに使っている人もいるかもしれませんが、多くの人は知って使っているように思います。なぜなら先生の前や本人には使わないからです。表の世界では使わないけれど、裏の世界では当たり前を使う。もしかすると昨年相模原市で起こった知的障害者施設での殺傷事件もそんな

な現象が表に現れたのかもしれない

私は絶対使いたくないです。もし本人がその言葉を聞いたなら、もし聞いた人の家族に障害のある人がいれば、もし聞いた人にとって大切な人に障害があれば……。使っている人は、周りにそういう人がいない前提で使っていますが、そう想像すると私には絶対使えません。

ここまで広がってしまったらどうにもならないのかもしれませんが、あきらめずに、本当の意味を知り、考えることが大切なことだと思います。」

この投稿も、何の反応もないかと思われたのですが、「友達に投稿のことについて話をしていた」と言う高校生がいたり、私にしても、同僚がこの記事に関して声をかけてくれたりということがありました。やはり見ている人は見ているし、何らかの問題提起にはなっているのだと思いました。これからも高校生友の会は、身近な問題に軸足を置いて、様々な問題を提起していきます。(決して図書カードめあてではありません)

なずなと渚と

この夏話題になった映画、「打ち上げ花火、下から見るか横から見るか」皆さんはご覧になったでしょうか。あの中に出場する主人公、なずなのような境遇の子を、今まで何人も見てきました。だから、なずながあんな行動をとってしまう

気持ちには分からないでもありません。でも多くの子は、自分の胸の内にある切ない思いは明かさず、そっとなまい込んだままでした。誰に告げることもなく、自分の中で消化しようとして、何度も何度も奥歯で噛みしめていたように思います。以前紹介したマイもその一人でした。

今年の九月に出版した拙著「ナツノオト」の主人公、渚もまたそうです。渚が思い、感じ、発する言葉は、実際に私の目の前にいた子どもたちの心の声であり、言いたかった思いです。それを直接聞ける人は、なかなかいないかもしれません。それは、すぐ傍にいないと聞けない声だからです。いえ、単に傍にいないだけではなく、心の傍にいないと聞けないものかもしれません。

一昔前まで教員は、子どものすぐ傍にいて、心の声を聞き取れることを当たり前にしてきました。今でもそうあるべきだと思います。しかし、個人のプライバシーに必要以上に踏み込むことをよしとしない風潮も感じます。踏み込むことで、その後には生じるかもしれないトラブルを未然に回避するというコンプライアンスの名の下に、子どもの声を敢えて聞き取ろうとしていないようにも思います。けど繰り返しますが、子どもはやさしいから、基本的に言いません。そっと自分の中に抱え込んでしまうことが多いように思います。

以前、中学生の男の子が、次のような日記を書いてきました。「僕の母さんは、僕が三歳の時に

離婚しています。再婚したのは、僕が小四か小五の時でした。それまで母さんは嫌がっていたけど、前の父さんに会いに行っていました。再婚してからも、一人で内緒で会いに行ったことがあります。でも、もう二、三年会ってません。

前の父さんに会いに行くこと母さんのことを訊いてくるけど、「再婚した」とは言えませんでした。もちろん今の父さんにも「会いに行った」なんて言えるはずありません。

今日、誰かが言ったように、「どっちをとる？」と訊かれたら、絶対に僕は答えられません。前の父さんも好きだし、今の父さんも好きだし、前の父さんのことをたまに思い出すと、何か複雑な気持ちになります。

何枚か、前の父さんと撮った写真があります。今の父さんに見えないように、僕の部屋に保管しています。前の父さんのことを思うと、今、それが一番の宝物です。」

子どもには何の罪もありません。でも親には親の人生があります。それは子どもにはどうしようもありません。それもこれも分かっているからこそ、誰も責めず、自分の中だけで重い固まりを飲み下そうとしているのですが、その姿はあまりにも切なくて、傍で見ていて、つい涙ぐんでしまいます。そんな思いの握りを、私は渚を通じて代弁してもらったのです。

今年も残りわずかとなりました。来る年が皆さまにとって、素敵なる年となりますように。